

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立大垣工業高等学校 全日制

学校番号

27

I 自己評価

1 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・誠実にして強くたくましい心と身体をもち、心豊かな人間性と確かな知識・技術を兼ね備え、創造性に富む実践的な産業人の育成を図る。
2 現状の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○工業の専門的な学習に興味を持ち、落ち着いた態度で前向きな学校生活を送っている生徒が極めて多い。 ○西濃地方唯一の工業高校として、地域のものづくり産業を支える人材を輩出している。地元企業からの信頼も厚く、就職状況は良好である。 ○資格取得者が多く、就職に対して意欲の高い生徒が多い。求人にも恵まれており、自分の希望する職種に就職しやすい。 ○部活動やものづくりにおいて、地道によく努力して優れた成果を上げている。 ▲日本全体の傾向ではあるが、不登校などの教育相談が必要な生徒が増加している。 ▲卒業後、グローバルに働く生徒が増えていることを踏まえると、基礎学力やコミュニケーション能力が不十分な生徒がいる。 ▲志願者が入学定員を満たしていない学科がある。
3 学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・次期学習指導要領の趣旨を具現するための授業改善（アクティブラーニングの導入） ・支援を要する生徒等、個に対応した指導の充実 ・地域や社会に貢献するとともに、グローバルに活躍できる人材の育成 ・本校の教育活動の積極的な広報 ・チーム大工としての組織的な指導力の強化
4 今年度の具体的な重点目標	<ol style="list-style-type: none"> (1) 生徒の学習意欲を高め、確かな力を身に付けさせる教育の推進 (2) 生徒に軸足を置いた豊かな人間性を育てる教育の推進 (3) 一人一人が帰属意識をもち生涯を見通した進路意識を高揚させる教育の推進 (4) 地域に開かれた信頼される学校づくり

年度目標			年度末評価		
5 評価項目 領域・分野	6 重点目標の達成に必要な具体的 取組・方策	7 達成度の判断・判定基 準あるいは評価指標	8 取組状況・実践内容 評価 項目の達成状況等	9 評価 A～D	10 成果と課題
(1) 学習指導	①アクティブ・ラーニング（AL） に関して、教科ごとに目標を定め た実践を継続するとともに、AL 型授業の定着を図る。	①生徒による授業評価の 結果 ②生徒・保護者アンケート の回答 ③研究授業・公開授業の教 員間評価 ④研究授業・公開授業の実 施件数	<ul style="list-style-type: none"> AL型授業推進のために、 各教科ごとに具体的な実 践目標を設定して授業改 善を実施できた。 各科代表者による研究授業 や、全教員が行う公開授業 ウィークに、各教員がAL 型授業を実践できた。 AL型授業推進のために必 要な環境（ICT機器の整 備等）が進んだ。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 全教員がAL型授業を理 解できた。 次期学習指導要領の実施 へ向け、今後も継続的な 研究と実践が必要であ る。 授業に関する生徒や保護 者へのアンケートの結 果では、各教員が熱心に 指導し、それを多くの生 徒が好意的に受け止め ている状況である。 今後は、<u>AL型授業の定 着が必要である。</u>
	②海外インターンシップ、プレゼン テーション大会、SDG's に関する 実践、英語力の養成を取組の軸と して、グローバル人材の育成を図 る。プレゼンテーション大会や SDG's に関する取組については、 教科横断的に実施できるようなカ リキュラムマネジメントを行う。		<ul style="list-style-type: none"> 地元企業と連携して海外イ ンターンシップを実施す るなど、グローバル人材育 成の取組を実施できた。 プレゼンテーション大会を 1年生はクラスごと、2年 生は学年全体で開催する などの取組を実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> プレゼン大会や SDG's (ESD活動)については、 特定の教科・科目内での 取組にとどまっている。 <u>教科横断的に実施でき るようなカリキュラム マネジメントが必要で ある。</u>
	③5S運動について、学科主任の小 集団活動による点検を通して、設 備・物品の安全な配置や管理、安 全に関する掲示を積極的に推進す る。		<ul style="list-style-type: none"> 本年度の取組状況は、 ㊦設備・物品の安全な配置 や管理→△ ㊧安全に関する掲示→△ ㊨不要品の廃棄→○ であった。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 学科主任の小集団活動を 行う時間が、なかなか確 保できないという課題 があり、左記㊦㊧が、学 科(一部の担当者)任せ になってしまった。 次年度は、<u>㊦設備・物品 の安全な配置や管理、㊧ 安全に関する掲示に力 を入れる必要がある。</u>

(2) 生徒指導	①充実した教育相談体制を維持し、生徒情報の共有を一層進めるとともに、いじめ防止対策を迅速に実施できる体制を構築する。	<ul style="list-style-type: none"> ①前年までの統計との比較 ②いじめの早期発見と対処の状況 ③支援生徒の生活改善状況 ④外部専門家の招へい回数 ⑤ケース会議の開催回数 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談室に3名のベテラン担当者を配置するなど、充実した教育相談体制を維持した。 ・いじめの撲滅のために、組織的対応を常に行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・発達障害など、特別な支援が必要と思われる生徒への職員の理解は進んだが、その対応については、さらなる研鑽を積む必要がある。
	②特別な支援を要する生徒について、職員研修により理解を深めるとともに、ケース会議の開催や、外部の専門家の活用、個別の教育支援計画の迅速な作成及び適切な実施などにより、個に応じた指導を行う。		<ul style="list-style-type: none"> ・ケース会議の開催、生徒指導部会からの迅速な資料提供によって、配慮が必要な生徒に関する校内での情報共有が進んだ。 ・ケース会議の開催、外部機関との連携を積極的に実施した。 ・個別の教育支援計画の作成については、対応が遅れる場合があった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの件数を、前年比-4件と減少させることができた。 ・メンタル面の弱さから不登校傾向となり、休学、退学、転学等に至る生徒が増加傾向にある。 <u>メンタル面が強い生徒の育成が必要である。</u>
(3) 進路指導	①「大工手帳」の一層の活用を通して、目標管理や自己管理を行い、キャリア教育を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ①「大工手帳」と「進路の手引」の活用状況調査の結果 ②卒業する生徒の進路内定率100%への達成度 ③基礎力診断テストの判定結果や、学習教材(マナトレ学習)の到達度診断の結果 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの生徒が、手帳を活用するようになってきた。 ・卒業する生徒のほぼ全員が、進路先を内定させることができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス(学科)による差がある。学年統一での取組が必要である。
	②朝学習について、全学科を見通したマネジメントにより、成果の向上を図る。		<ul style="list-style-type: none"> ・朝学習の見直し、H31年度から実現することになった。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>基礎学力が不足している生徒に対する新たな支援策の確保が必要である。</u>
	③情報技術科について、進学意識の向上を図るとともに、適切な進路相談や充実した補習により、国公立大学を含む生徒の進路希望の実現を図る。		<ul style="list-style-type: none"> ・大学進学に対応した授業、適切な進路相談、補習の実施などにより、生徒の進学意識の向上を図ることができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・進学希望先(志望大学等)の選択が、「入りたい学校」ではなく、「入れる学校」になってしまっている面がある。<u>目標を高く持たせる指導が必要である。</u>

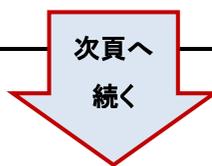
(4) 学校経営	①地域産業のニーズや将来の少子化を踏まえ、特色ある学科の在り方や教育課程について検討する。特に、「専門高校生地域連携推進事業」では、日頃の授業（カリキュラム）との連携を重視した地域貢献活動を実施する。	①学校HPの更新回数 ②保護者アンケートの回答 ③地域に貢献する活動への参加人数	・「専門高校生地域連携推進事業」については、地元自治体や地元企業などと連携して、様々な教育活動や地域貢献活動を行うことができた。	B	・将来の少子化(学級減や学科減)を踏まえた学科の在り方や教育課程に関する検討を、本格的に行う必要がある。
	②地域や保護者のニーズを踏まえながら、一分掌一改善や、部活動のルールの見直し等により、教育の質を落とさない教職員の働き方改革を推進する。		・会議時間の短縮化、事務処理の効率化（ペーパーレス化推進）、行事の削減等により、教職員の働き方改革が若干進展した。 ・これにより、教員本来の業務（授業の質の向上、生徒との交流）に費やせる時間が、従前よりも確保できるようになった。	B	・まだ十分とは言えないので、今後も継続が必要である。

11 総合評価 B

12 来年度に向けての改善方策

1 生徒の学習意欲を高め、確かな力を身に付けさせる教育の推進

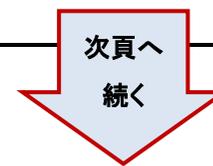
①アクティブ・ラーニング（AL）に関して、教科ごとに目標を定めた実践を継続するとともに、AL型授業の定着を図る。
 ②海外インターンシップ、プレゼンテーション大会、SDG's（ESD活動）に関する取組、英語力の養成を取組の軸として、グローバル人材の育成を図る。プレゼンテーション大会やSDG'sに関する取組については、教科横断的に実施できるようなカリキュラムマネジメントを行う。
 ③5S運動について、学科主任の小集団活動による点検を通して、設備・物品の安全な配置や管理、安全に関する掲示を積極的に推進する。



II 学校関係者評価 平成31年1月29日

1 学習指導（生徒の学習意欲を高め、確かな力を身に付けさせる教育の推進）
 ・アクティブラーニングの推進は、今後も必要である。
 ・グローバル化に対応した人材の育成や生徒のコミュニケーション能力向上を目指す取組は、今後も進めていく必要がある。
 ・5S運動（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）の推進や安全管理の徹底は今後も必要である。

2 生徒指導（生徒に軸足を置いた豊かな人間性を育てる教育の推進）
 ・生徒が、自分の悩みやいじめの問題などを、普段から気軽に何でも相談できるような雰囲気づくりを進める必要がある。さらに、メンタル面が強い生徒の育成を目指す必要がある。
 ・問題を抱えた生徒に対しては、個に応じた指導（支援）が今後も必要である。



2 生徒に軸足を置いた豊かな人間性を育てる教育の推進

- ① 充実した教育相談体制を維持し、生徒情報の共有化を一層進めるとともに、メンタル面が強い生徒を育成できる体制の構築を目指す。
- ② 特別な支援を要する生徒について、職員研修により理解を深めるとともに、ケース会議の開催や、外部の専門家の活用、個別の教育支援計画の迅速な作成及び適切な実施などにより、個に応じた指導を行う。

3 一人一人が帰属意識をもち生涯を見通した進路意識を高揚させる教育の推進

- ① 「大工手帳」の一層の活用を通して、目標管理や自己管理を行い、キャリア教育を推進する。
- ② 基礎学力が不足している生徒に対する新たな支援策を検討する。
- ③ 進学希望の生徒に対して、進学意識の向上（目標を高く持たせる指導）を行うとともに、適切な進路相談や充実した補習により、国公立大学を含む生徒の進路希望の実現を図る。

4 地域に開かれた信頼される学校づくり

- ① 地域産業のニーズや将来の少子化を踏まえ、特色ある学科の在り方や教育課程について検討する。「専門高校生地域連携推進事業」では、地元自治体や地元企業との連携を重視した活動を実施する。
- ② 地域や保護者のニーズを踏まえながら、一分掌一改善や、部活動のルールの見直し等により、教育の質を落とさない教職員の働き方改革を推進する。

3 進路指導（一人一人が帰属意識をもち生涯を見通した進路意識を高揚させる教育の推進）

- ・ 就職後のミスマッチや早期離職を避けるために、生徒の「精神的な強さ」と「目標管理や自己管理能力」を高めるような指導（キャリア教育）が必要である。
- ・ 基礎学力向上に関する取組は、今後も必要である。

4 学校経営（地域に開かれた信頼される学校づくり）

- ・ 地元自治体や地元企業との連携を深め、生徒に社会貢献や地域貢献を体験させる活動を、今後も取り入れるべきである。
- ・ 今後は、より一層、会議の効率化や会議資料のペーパーレス化、部活動ルールの見直しなどを行い、教育の質を落とさない働き方改革を推進する必要がある。